

日本におけるスクールカウンセラーの養成に関する一考察

——米国大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラム経験をもとに——

学校教育開発学コース 高岡文子

The Preparation and Education of School Counselors in Japan
——Referred to the author's own experience of the school counselor
preparation program at the graduate school in the U.S.A.——

Ayako TAKAOKA

The major purpose of this article is to describe the problem of preparation and education of school counselors in Japan, and especially to highlight the following: (a) the current status of school counseling services and the major issues that both teachers and counselors are dealing with today in Japanese school systems, and (b) the preparation and education of school counselors in the U.S.A., stressing the author's own experience of participating in the school counselor preparation programs at Boston University Graduate School of Education. This review further discusses the future challenges for school counselors and anticipated trends of the school counselor preparation programs at the graduate level in the university setting in Japan.

目次

- I. はじめに
- II. 日本のスクールカウンセラー制度の現状と問題点
 - A. 学校現場における問題点
 - B. 考えられる問題の原因
- III. 米国大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラム
 - A. 米国のスクールカウンセラー養成システム
 - B. ボストン大学のカリキュラム
 - C. 公立高校におけるインターン（現場実習）経験
 - D. グループスーパーヴィジョンとケースカンファレンスから学んだこと
- IV. 今後の日本のスクールカウンセラーに与えられた課題
 - A. 学校の内側から見た学校システム全体の理解
 - B. スクールカウンセラーの役割の認識と今後の活動領域の広がり
 - C. 日本の大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラムの方向性
- V. まとめ

I. はじめに

現在、日本の学校は、いじめや不登校や非行に代表されるさまざまな問題が山積みの危機的状況にある。文部省は、1995年4月、これらの複雑かつ深刻な問題に緊急に対応していくためには、学校におけるカウンセリング機能の充実が必要であると考え、「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」を開始した。この事業によって、臨床心理に関する高度に専門的な知識・経験を有する専門家が、スクールカウンセラーとして、各都道府県の小・中・高校に派遣され始めた。最近では、国家予算以外に、各地方自治体の単独予算による派遣計画と導入もすすめられている（横湯，1997）。これまでは、教師のみによる学校教育相談が行われてきた「閉鎖的」な学校現場に、新たに外部からの専門家が投入されるこの画期的な試みは、まさに我が国の「スクールカウンセラーの新しい時代の幕開け」（村山，1995）と呼ぶにふさわしい。そして、年々増加する派遣校数からもうかがえるように、心理臨床現場から学校への接近は急速に進む状況にあり（伊藤，1997）、カウンセリングは、学校教育の中で今後ますます積極的な役割を果たす方向にあると言えるだろう。

しかし、3年を経過した今、学校現場におけるこの派遣制度に対する反応は、さまざまである。実施校からの感想は、おおむね評価も高く好意的であると見受けられる一方で、学校とスクールカウンセラーの間で不協和音が聞こえてきたり(原田・府川・林, 1997)、議論も起きている(横湯, 1997)。学校現場からの実践報告(大塚, 1996)を読むと、学校側からは、カウンセラーを受け入れることへの不信感や猜疑心、カウンセリングに対する誤解や認識の違いによる戸惑いや期待はずれの声が聞こえてくる。一方、スクールカウンセラー側からは、たった一人で未知の学校という世界に身を投げ込まれることへの心細さや、勝手の違う所で一体何が起るのか、何をしたいのかがわからない不安や戸惑い、先生からの期待に応えるためにも一刻も早く成果をあげなければという焦りなどが感じられ、まさに緊張と手探りの状態で日夜活動している様子がひしひしと伝わってくる。

将来、スクールカウンセラーが、学校現場の先生方から、カウンセリングについての正しい理解と承認を得ると同時に、先生方の期待にきちんと応えていくためには、スクールカウンセラー自身が、学校現場において心理臨床家としての専門性を生かせる力量と資質の向上を問われることになるだろう。現在まだ、日本においては、スクールカウンセラーを養成する大学院のプログラムが整備されていないが(石隈, 1996)、今後、現場で即実践力が要求されるスクールカウンセラーにとって、十分な養成の機会を持つことが重要になってくると思われる。筆者は、カウンセラー制度に関する先進国であると言われる米国の大学院に留学する機会を得た。留学時代には、米国のスクールカウンセラーの資格を取得するために、大学院修士課程のスクールカウンセラー養成プログラムを通じて、公立高校における現場実習を経験した。この経験は、その後3年間、米国の公立高校で正規のスクールカウンセラーとして勤務する上で非常に役立ち、実に意味のあるものであった。

本稿では、将来日本において発展が期待されるスクールカウンセラーの養成に関する考察を試みたい。近年の日米のスクールカウンセラー制度に関する研究論文や文献を概観しながら、まず、日本のスクールカウンセラー制度の現状と問題点を述べ、次に、筆者の米国大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラムの経験を振り返り、最後に、今後の日本のスクールカウンセラーに与えられた課題について、筆者の考えを述べようと思う。

II. 日本のスクールカウンセラー制度の現状と問題点

A. 学校現場における問題点

1. 学校現場からの肯定的反応と否定的反応

学校という教育現場に、新しく外部の専門家のスクールカウンセラーが入るにあたり、現場からは、肯定的反応と同時に、さまざまな否定的反応も生じている。

例えば、全国で限られた数の派遣校に選ばれること自体が、受け入れ側の学校にとっては、必ずしも嬉しいニュースであるとは限らない。指定されたことを名誉のあることと感激し、カウンセリングルームの準備の段階から期待に胸を躍らせ、PTA会長はじめ学校教職員が総出で、暖かい協力と援助を惜しみない学校がある。また一方で、「なぜ私の学校にカウンセラーが必要なのか?」、「あの学校は、カウンセラーが派遣されるほど、問題が多発し荒れている学校と世間からレッテルを貼られては、迷惑である。」という不名誉を嘆く声や、「カウンセリング論を学校に持ち込むと、生徒を甘やかし、学校にしまりがなくなるのではないか?」という懸念の声があがったり(國分, 1998)、受け入れに乗り気になれず尻込みをしている学校もある。現場の先生は望んでいないのに、管理職のみが張り切って、カウンセラーを引っ張ってきたために、まるで「やっかいなお荷物」や「歓迎されざるお客様」をかかえてしまったような、気まづく重苦しい雰囲気の流れている学校もある(村山, 1996)。あるいは、担任教師がアレンジしてくれるケースしか持たせてくれないことに不満を抱き、もっと積極的に学校全体にかかわろうとしたカウンセラーに、先生方からストップがかかった例もある(村山, 1996)。カウンセラーは、「本来学校の先生が扱うべき心の問題や教育の領域に、心のことだけ取り出してごちゃごちゃするやつ」という誤解(河合, 1996)や、カウンセリングは、「教師がトータルに一人の子どもとかかわり生きていくことを邪魔するもの」という批判(篠原, 1995)さえ生まれている。

残念ながら、現時点では、現場の先生方の間に、「スクールカウンセリングとはどういうものなのか?」、「スクールカウンセラーとは何をする人なのか?」という根本的な理解がまだないと言えよう。上記のような批判や誤解は、詰まるところ、学校臨床のしっかりとした土壌ができあがっていない所に、あわてふためくようにして制度が導入されてしまったことと関係しているようにも思える。

2. スクールカウンセラーの戸惑いと困難さ

学校や教師の側だけでなく、派遣される側のスクールカウンセラーも、さまざまな問題に直面している。最初から個人相談だけに深入りしようとしたために、先生との関係が切れてしまって、孤立感を感じるカウンセラー(村山, 1996)、立派なカウンセリングルームを作ってもらったが、生徒が相談に来ないと嘆くカウンセラー、学校のカウンセリングルーム内で高校生のクライアントに煙草を吸ってもいいのか問われ、拒否することに大きな圧力を感じてしまうカウンセラー(東山, 1996)などの姿が浮かびあがってくる。あるいは、ある不登校の生徒が復学する時に、カウンセラーは、担任教師がその生徒の立場に立ってくれることを期待したのに、教師に一人の生徒のみに特別配慮をするわけにはいかないと断られ、カウンセラーの側には、教師に対する不満や非難の気持ちが生まれ、反対に、教師の側には、カウンセラーの意見が教師の実状を知らない一方的意見にしか聞こえず、両者間に強い感情的対立が生まれてしまうケースもある(成田, 1996)。

このようなスクールカウンセラーの戸惑いと困難さは一体どこからくるのだろうか。従来、カウンセラーは、学校外の個人面接室といういわば非日常的な空間で、カウンセラーvsクライアントという個人の枠組みの中で、治療的立場に立って、心理臨床に携わることが常識だった(東山, 1996)。しかし、いざスクールカウンセラーとして働くことになると、様相はかなり異なってくる。スクールカウンセラーは、学校という日常的な空間で、学校組織を構成するメンバーの一員vs生徒という大きな学校組織の枠組みの中で、治療的立場に立って心理臨床に携わることになる。またスクールカウンセラーは、治療的立場のみならず、予防的立場、成長促進的立場にも立つことが要求され、従来の心理臨床のモデルの変換を迫られる事態にまで直面させられる(近藤, 1995)。もちろん、外部からのスクールカウンセラーが、これまで学校には欠けていた臨床心理という新しい視点を運び込むことで、「閉鎖的」な学校空間に風穴が通り(大塚, 1996)、問題解決に明るい希望の光が投げられたという成功例も聞くが、現状では、心理臨床家の多くは、学校組織に入ってから、あらためて、学校における心理専門職として働く難しさを痛感していると言えよう。

B. 考えられる問題の原因

これらの現象は、何に由来するのであろうか? 紙幅の制限の関係で、十分に論じる余裕がないが、とりあえず、次の3点を指摘することができる。

1. 日本の学校の「閉鎖性」とスクールカウンセラーを組み込んだ学校教育プログラム全体の検討の欠如

これまで日本の学校は、子どもの教育に関する全ての任務を任せられた先生の聖域として閉じられていた(河合, 1996)。また、学校現場でスクールカウンセラーを組み込んだ学校教育プログラム全体の検討が十分なされないままに、教師に問題解決と生徒指導について専門的助言ができる心理臨床家として、スクールカウンセラーが派遣されるようになった。

2. 学校職場経験の少ないスクールカウンセラー

スクールカウンセラーの選考については、財団法人日本臨床心理士資格認定協会が認定する臨床心理士の有資格者を基本として任用することが明文化されているが(村山, 1997)、現臨床心理士の大半は、児童相談所、心理教育相談所、医療機関等での経験を持ち、学校における職場経験が少ないため、学校の教育や臨床活動について十分理解しているとは言い難い。

3. 日本の大学院のスクールカウンセラー養成プログラムの未整備

現時点では、日本の大学院のスクールカウンセラー養成プログラムは整備されておらず、カリキュラムの内容も、スクールカウンセリングに関する専門知識と実践的技術を十分とりあげていないところが多い(伊東, 1980; 石隈, 1995a)。

次章では、将来、日本のスクールカウンセラーの養成の検討に役立つと思われる米国大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラムについて、取り上げてみることにする。

III. 米国大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラム

A. 米国のスクールカウンセラーの養成システム

米国の学校では、教科指導は教師の専門領域、生徒指導や進路指導はスクールカウンセラーやスクールサイコロジストに代表されるメンタルヘルス専門職の領域というように、基本的に分業システムが成立している(村山, 1997)。米国のスクールカウンセラー制度は、100年以上の長い歴史を持つ。カウンセラーが学校内における専門的な役割や機能を確認するに至った歴史的背景を概観すると、20世紀初頭に、生徒のさまざまな問題に対して、それ以前の教師による介入のみでは対処しきれなくなった公立学校に、新たに専門職としてスクールカウンセラーが登場したことに始まる(Paisley & Peace, 1995; Schmidt, 1993)。各州毎にスクールカウンセラーの資格

や免許のための基準が設定され、それに合わせて、カウンセリングと関連教育プログラム認定協議会 (the Council on Accreditation of Counseling and Related Education Program, CACREP) の認定を受けた大学院に、スクールカウンセラーの専門教育と訓練のための養成プログラムが作られていった (Gibson et al., 1993)。その後、プログラムの内容は、その時代の生徒のニーズや社会的影響の変化に合わせて、随時修正されてきている (石隈, 1995a)。

スクールカウンセラーになるには、最低、大学院の修士課程修了が求められ、カウンセリング、教育心理学、臨床心理学などの専攻分野で、スクールカウンセリングの理論、専門知識、実践的技術を習得しなければならない。修士号の取得後、幾つか特定の科目の単位を満たしていれば、各州毎に行う資格認定試験を受験することができる (平木, 1995)。試験科目や内容や資格条件については、履修科目数・インターン経験の有無など、州によって多少の違いはあり、その州でカウンセラーとして働くためには、州の資格認定試験に合格する必要がある (平木, 1995; Paisley & Hubbard, 1994)。大学院のスクールカウンセラー養成プログラムの細かい内容は、各大学院で異なるが、次節では、筆者が留学したボストン大学大学院教育学研究科カウンセリング専攻学科修士課程のものを記すことにする。

B. ボストン大学のカリキュラム

筆者は、1991年夏から1993年春までの2年間、マサチューセッツ州、ボストン大学大学院教育学研究科カウンセリング専攻学科修士課程に留学する機会を得た。1992年春に修士号を取得後、同州スクールガイダンスカウンセラーの資格取得のために、1992年秋から1993年春まで、ボストン市郊外の公立高校でインターン (現場実習) 経験を積んだ。

1. スクールカウンセラー養成コースのプログラムの概要

修士課程プログラムの一つの特徴として、現場で役立つ実践家養成に重点を置いている。学生は、講義の中から、カウンセリングの基礎理論と専門知識及び技術を習得し、更に、現場実習を通じて、カウンセリングに関する総合的理解と実践的技術の向上が要求される。

プログラムは、一般のカウンセラー養成コース (以下、一般コースと記す) と筆者の所属したスクールカウンセラー養成コース (以下、スクールカウンセラーコースと記す) の二種に分けられる。期間は、一般コースは、9月入学翌年5月修了の約8ヶ月間、スクールカウンセ

ラーコースは、夏期授業を含む6月入学翌年5月修了の約1年間である。スクールカウンセラーコースは、マサチューセッツ州のスクールガイダンスカウンセラー資格認定基準 (1982年有効) を満たすように、一般コースに課される必修7科目及び選択1科目の合計8科目 (32単位) の他に、スクールカウンセリングと職業カウンセリングの2科目が加わり、合計10科目 (40単位) の履修が義務づけられている¹⁾。

カリキュラムの特徴として、修士論文は課されない代わりに、実践家に必要な現場での実力を高めるため、「スーパーヴァイザーの下でのインターン (現場実習)」と呼ばれる通年必修科目を履修し、1週間に最低20時間以上 (1年間に換算して300時間) の現場実習をこなさなければならない。メンタルヘルスクリニックや民間のカウンセリングセンター等での実習が認められる一般コースと異なり、スクールカウンセラーコースでは、州内の小・中・高校で現場実習をすることが定められている。各学期に最低4科目を履修しながら、週約2、5日以上学校で実習することは、時間的には厳しいが、実際に学校現場に自ら入り、生身の教師や生徒と出会い、スーパーヴァイザーの指導の下で、現場感覚や実践力を身につけることができる利点は大きい。また、この授業の一貫として、ケースカンファレンスとグループスーパーヴィジョンの機会がもたれる。毎週1回 (約3時間)、スクールカウンセリング専門の大学指導教官の下で、小・中・高校で実習する7～8人の学生が集まり、現場で担当した生徒の事例を持ち寄る。更に、学生は、指導教官に、事例の詳細な記録をまとめたノートを毎月1回提出し、スクールカウンセリングの理論・技法・研究等に関する最低10個の学術論文を読み、その要旨を毎学期提出することが義務づけられている。このように、米国の学生は、内容の濃いインテンシブなプログラムの中で、学校における実習経験を積みながら、実践力を伴うスクールカウンセラーとして養成されていくのである。

C. 公立高校におけるインターン (現場実習) 経験

1. フィールド (実習の場) の選択

フィールドの選択は、基本的に学生本人に任されている。学期始まりまでに、指導教官のアドバイスを参考に、自分自身で、電話交渉・インタビューを経て、自分の専門や興味とマッチし、なおかつインターンとして1年間引き受けてくれる学校を見つけることは容易なことではない。筆者は、思春期の子どもへの関心から、数々の高校に交渉を重ねたが、語学のハンディや生育環境の違いもあり、電話交渉の段階ですげなく電話を切られたり、

インタビューで、「君がスクールカウンセラーになりたい気持ちはよくわかるが、米国文化に育っていない上に、今の語学のレベルでは、スラング混じりの早口の英語で、複雑な心の問題を語る米国の高校生を理解できるとは思えない。」と断られ続けた。3ヶ月間かかって、ボストン郊外のチェルシー市にある民間のカウンセリング施設での実習が決まったが、学校ではないために、その年は修士号取得のみに留まった。翌年、同市の公立のC高校で、もう1年間実習ができることになり、スクールガイダンスカウンセラーの資格（小学校5年生から高校4年生対象）を取得できた。この経験は、筆者にとって、外国人が異郷の地で母国語以外の言語でカウンセラーになることの厳しさを学ぶと同時に、自分の能力と適性を見極めながら、自分に最適の現場を見つけるための大事な訓練であった。

2. C高校におけるカウンセラーインターンとしての生活

初めてのC高校におけるインターン生活は、ベテランのカウンセラーには当たり前のことにも目を丸くし、失敗してはまた一つ新しいことを学ぶことの繰り返しの毎日であった。1年間の現場実習から学んだことはあまりにも多く、その全てを記すことは紙面上不可能に近い。従って、その中から最も印象深かったものについて、いくつか述べてみたい。

a) 学校現場とスクールカウンセラーのマッチング

チェルシー市は、中南米からの移民やベトナム・カンボジアからの難民など多民族が混在し、非常に貧しく、犯罪率が極めて高い地域だった。地域の影響もあるのか、C高校は、高校中退、思春期妊娠、ドラッグ依存やアルコール中毒、児童虐待、ギャング間の抗争、非行など深刻な問題をかかえていた。最初は、筆者の生育環境と、米国多民族社会特有の問題がはびこるチェルシー市やC高校の文化とのギャップの大きさが心配されたが、意外にも、筆者は、C高校に違和感なく溶け込めた。外国人生徒の多くは、筆者に「外国人のあなたなら、僕/私の気持ちをわかってくれそうな気がする。」とつたない英語で語り、米国人のカウンセラーに対するよりも親近感を持って、積極的に援助を求めてきた。筆者も、たとえ同じ母国語を話さなくても、遠い祖国を離れて異国文化の中で戸惑いながら生きている彼らに対し、強い仲間意識や共感を自然に覚えた。「外国人」という共通項が、両者に言葉や文化の壁を超えさせてくれたのかもしれない。もし、英語を母国語としないアジア系マイノリティの筆者が、ワズプ(W.A.S.P.)の生徒で構成される私立高校

をフィールドにしていたら、状況はどう展開していたかは疑問である。学校現場とスクールカウンセラーのマッチングは、カウンセリングの成否に何らかの影響を与え得ると言えよう。

b) バリエエティーに富むスクールカウンセラーの役割と活動内容

近年、米国の学校でも、「スクールカウンセラーは、限られた持ち時間の中で、何をどこまですべきか」など議論が生じている(Paisley & Borders, 1995)。理論上は、カウンセリング、コンサルテーション、コーディネーションの3つに分類されるスクールカウンセラーの役割も、実際には互いに独立するものではなく複雑に絡み合う。C高校のカウンセラーも、時間との闘いの中で、複雑かつ多様な活動に取り組んでいた。更に、カウンセリング効果を高めるため、全校生徒約800人を3人の常勤スクールカウンセラーが分担し、各カウンセラーが、入学から卒業まで4年間、同じ生徒を担当する工夫がされていた。

学業面の援助や進路相談・職業指導等に関するキャリアカウンセリングは、高校のカウンセラーの重要な仕事である。カウンセラーは、生徒に関するあらゆる情報が入力されているコンピューターを一人一台与えられ、全生徒対象に、学力レベルに合わせて教科スケジュールを作成・変更したり、卒業必修科目と単位数の確認を行う。シニア(4年生)には、大学選択や奨学金・就職情報を得るのに便利なGuidance Information Systemと呼ばれるコンピュータープログラムの使い方も指導する。このように大半の時間をコンピューターの前で過ごすことに対して、現役カウンセラーの中には、心のケアが必要な生徒に個別カウンセリングを十分できないことへのフラストレーションを口癖にする者もいれば、深刻な相談は他の専門家に任せ、キャリアカウンセリングこそ高校のガイダンスカウンセラーの重要な任務と割り切る者もいた。また、時間上効率的なガイダンス形態も活用し、中学生への高校入学ガイダンス、シニアと保護者を体育館に集めて行う大学進学、就職に関するガイダンス、大学訪問ツアーなどを企画・実施した。経済的理由から勉学よりも就職を優先する教育価値観や、高学歴のロールモデルがない家庭背景のために進学動機の低いC高校の生徒には、卒業後の扉を開くキャリアカウンセリングは特に意味があり、生徒が自分の能力や適性を知り、将来の人生設計に自覚と責任をもつことを学ぶ効果もあった。

c) 多種多様なカウンセリングの対象・生徒の来談のスタイル・生徒とのつきあい方

C高校には、深刻な問題をかかえる生徒が多い。カウンセラーは、度重なる少年院入りのために退学処分を受けた生徒の弁護者として、校長に再入学のチャンスを掛け合い、妊娠出産後も卒業を望む生徒に、高校の単位取得可能な特別プログラムへの転入手続きを手伝い、学業不振の転入生に関する的確なアセスメントを行う者(モニター)として、その生徒の授業中の適応状況を調べる。薬物依存と中毒は全校に蔓延する問題であり、個別及びグループカウンセリングや、学外の医療・相談機関へのリファールを行う。C高校卒業生が自殺した時は、全クラスを廻り、「生命の尊さ」「自殺予防」について話し合った。法律により、生徒の身の安全と権利を守る義務を負うカウンセラーは、児童虐待や性的虐待のケースも扱い、児童福祉局の調査官への連絡、カウンセリング施設や医療機関の斡旋、弁護士の紹介など、一日中駆けずり廻ることもあった。筆者も、インターンとして、日夜緊急対応に追われ、問題の根深さに心を痛めつつも、仕事の厳しさと責任の重さを実感した。

仕事は、生徒の深刻な悩みや問題対応だけではない。授業中に取っ組み合いの喧嘩になり教師が連れてきた1年生男女は、筆者が仲裁をし、停学処分を逃れた。バスケットボール部のキャプテン、学校中の人気No.1のシニア男子は、昼休みにふらっと訪ねて来て、快活におしゃべりをしていたが、チャレンジのしがいのない高校生活への不満をぼつりともらし、始業のベルが鳴った瞬間、いつもの笑顔に戻って、「また、来るね。」と走り去った。「喧嘩の仲介役も、おしゃべりの相手も重要な仕事の一つ、カウンセラーは生徒のために、いつも心のドアを開いていなければならない。」と、スーパーヴァイザーは教えてくれた。

いつもゆっくり時間をとって生徒に会えるとも限らない。生徒は、朝の始業前にはオフィスの前で列をなして待ち構え、10分の休憩時間中には集団でオフィスになだれこんでくる。C高校には、カウンセラーは、緊急時を除き、授業中には生徒に会わない規定があったのだが、筆者はそれを知らずに、「緊急なんだ。今すぐ話を聞いて。」とオフィスに飛び込んできた生徒に真剣に対応し、実は単に嫌いな授業を抜け出す目的だったことが後で判明し、「生徒のさぼりに荷担するつもりか。」と激怒する先生に謝罪したこともあった。初回面接以降4ヶ月間もアポイントメントをすっぽかさされ続け、果ては何の連絡もなく退学していった生徒にがっくり肩を落とすこともあった。スーパーヴァイザーは、オフィスに鍵をかけ誰にも邪魔されずにほっと一息ぬく秘訣や、学校の集団生活の秩序を守るための多くの規則や、面接時間に現れな

い生徒に対しては、自ら教室に生徒を出迎えに行く技など、長年の経験から「学校生活をサバイバルする」ための知恵を筆者に授けてくれた。

勤務時間中は、出来る限りオフィス内にこもらず、教師同様、学校中を歩き回り、廊下で生徒を見かけた時には、すすんで声をかけ、立ち話をしたり、ジョークを飛ばし合ったり、生徒の活躍の場である音楽会やクラブの試合の応援にも駆けつけた。日常の生徒との何気ない接触や細かい気配りが、「あなたの存在をいつも気にかけ、温かく見守っている人がいますよ。」というメッセージとして生徒の心に響き、親しみやすいよき理解者として信頼を得て、いざ問題に直面した時に思い出してもらえる存在になるのだった。

d) カウンセラーと教職員の連携プレー及び学校全体のサポート体制

新学期のオリエンテーションで、校長は「全ての生徒がいつも誰か自分の話を聞いてもらえる人を必要としています。ここにいる全ての教職員が、生徒たちのためにその役割を果たして下さい。」と語った。カウンセラーは、教師へのコンサルテーションも大事にしていた。教師のオフィス訪問を待つよりもむしろ、自ら積極的に教職員専用のラウンジに出かけ、教師の生の声(対応に困っている生徒への苛立ち、非協力的な保護者への怒り、多忙な生活からくる心身の疲労感など)に耳を傾け、励まし、適切なアドバイスをした。

また、毎週火曜日の午後にかかれるチューデントサポートミーティングへも参加した。そこでは、スクールサイコロジスト、児童虐待や家庭内暴力や家出を扱うスクールソーシャルワーカー、勤労生徒に職場を斡旋するキャリアカウンセラー、薬物専門のカウンセラー、怠学傾向の生徒の家庭訪問や、警察や少年院の保護観察官と連携しながら非行を扱うアウトリーチカウンセラー、ドロップアウト予防のための夜間プログラム・妊娠出産をした生徒のための地域施設のスタッフ、スクールナースなどの専門職が集まり、特にケアが必要な生徒についての指導方法とサポート対策が話し合われた。これは、メンタルヘルスの専門職、教師、管理職、その他全ての学校の教職員が、個人レベルで生徒につき込める時間とエネルギーの不十分さを補うために連携・協力し、お互いの専門性を尊重しながら、学校全体として生徒をサポートしていくというC高校の教育方針に基づくものだった。

e) 秘密保持 (Confidentiality) の問題

スクールカウンセラーが、生徒のことで保護者や教師と連絡を取る時は、慎重を要する。子どもが心配のあま

りに、カウンセリングの内容を聞き出そうとする保護者や、教室でもラウンジでも声のトーンを落とさずに「あの生徒は、なぜカウンセリングが必要なのか。」と聞いてくる教師がいる。筆者がある生徒のことで担当教師とアポイントメントを取った時、その先生が直接生徒に「なんでカウンセラーはあなたの情報を知ろうとしているの?」と聞いてしまったことがあった。筆者が事前に生徒にアポイントメントのことを伝えていなかったために、生徒が、「私の先生と一体何について話すの?」と心配顔で筆者に聞きにきて、返答に立ち往生してしまった。その時は、スーパーヴァイザーに、「まず生徒本人に、先生と連絡を取り合うことを確認しておくべきだった。」と厳しく注意を受けた。秘密保持は、カウンセラーの倫理として、常に心して扱わなければならない問題である。

上記のことは、筆者がC高校でのインターン生活から学んだうちのごく一部に過ぎないが、日米間の文化、カウンセリングの歴史や制度、学校組織の違いを越えて、将来スクールカウンセラーを目指す一人の人間として、学校におけるカウンセリングについて、現場経験から学ぶことがいかに重要であるかを実感させられる貴重な経験であった。

D. グループスーパーヴィジョンとケースカンファレンスから学んだこと

1. スクールカウンセリングに関する知識と経験豊かな3人のスーパーヴァイザー

筆者にとって、スクールサイコロジストである大学指導教官、10年以上現役で活躍しているC高校のスクールガイダンスカウンセラー、カウンセリング専攻博士課程の学生というように、いずれも長年の学校現場における心理臨床経験が豊かな3人のスーパーヴァイザーの指導が、毎週1回個別に受けられたことは非常に恵まれていた。スーパーヴィジョンの内容も使い分け、現場のC高校のスーパーヴァイザーからは、慣れない学校に適應していくスキル、C高校の独特の文化や生徒のニーズに合った援助方法などを主に学び、大学の指導教官と博士課程の学生からは、現場の教職員との葛藤やインターンとしての複雑で微妙な立場など、現場のスーパーヴァイザーには直接語りにくい内容を聞いてもらえた。インターン期間の最初と最後に、3人のスーパーヴァイザーがC高校に勢揃いし、筆者を含めて、筆者の個人目標、長所と短所、現場経験の成果、今後の課題、全体的評価などについて話し合われたが、3者からのコメントをもたえたことは、通常の数倍の学習価値があった。

2. ケースカンファレンス兼グループスーパーヴィジョン

毎週1回大学で行われたケースカンファレンス兼グループスーパーヴィジョンに集まる学生は皆、学校という共通のフィールドにいたので、学校心理臨床の難しさについての共通理解があり、心理的サポートも得られやすい利点があった。他のメンバーの事例を聞くことで、学校の種類（公私立）や対象生徒の年齢による問題の質の違いやカウンセラーの役割について、新たな視点の発見もあった。具体的面接場面におけるクライアントへの対応やクライアントとの関係の問題、自分一人では気づきにくい自分の癖や傾向、転移や逆転移の問題などの指摘、自殺や虐待などの難しいケースについての的確なアドバイスや実際的な指導なども受けられた。指導教官の強い勧めで、多くのメンバーが教育分析に通い、自分自身のカウンセラーとしてのありようを見つめ、成長するための経験をより深めた。

3. 事例の記録ノート作成

フィールドから帰宅後、毎晩睡魔と闘いながら書き続けた現場での経験と担当事例の記録ノートは、1年間で200ページに及ぶ膨大な量に昇る。毎月1回指導教官に提出し、ぎっしりと赤ペンで書かれた厳しい批評と懇切丁寧なコメントつきで返却されるノートを何度読み返し、内省したことであろう。カウンセラーとして事例の何に気を取られ、何を見落とし、何が理解できていなかったのかという根本的なことを問われ続けた。カウンセリング過程のつまづきを、むやみに自らの責任と捉え自己嫌悪に陥りがちの筆者に、真の原因に気づかせ、次に具体的に何をすべきなのか考えさせてくれもした。ケースカンファレンスとスーパーヴィジョンと事例の記録ノート作成の全てが、筆者にとって、単に事例に対する理解を深めるだけでなく、数ある臨床現場の中から、あえてスクールカウンセラーとして働くことを選択した自己を理解し、カウンセリング観を分析し、適性を問い、他の誰でもない自分というカウンセラーを育て上げていくために欠かせない訓練であった。

IV. 今後の日本のスクールカウンセラーに与えられた課題

これまで見てきたように、我が国のスクールカウンセラー制度は、改善されるべき問題も多い。本章では、今後の日本のスクールカウンセラーに与えられた課題について考えたい。

A. 学校の内側から見た学校システム全体の理解

日本では、スクールカウンセラーを組み込んだ学校教育プログラム全体の検討が欠けたまま派遣が始まり、カウンセラーが現場に入る前に学校システムを十分理解できていなかった。学校における心理臨床家であるスクールカウンセラーにとって、クライアントは、生徒だけでなく、教師、生徒の保護者を含め、学校というシステム全体である。スクールカウンセラーが学校システム全体がかかえる諸問題を理解していくためにまず必要なのは、自分の勤める地域や学校という場の特性（生徒や教職員が醸し出す雰囲気や風土、教育方針、管理指導体制、生徒及び教師間の人間関係など）について十分知ることであろう。

スクールカウンセラーは、これまでのように、クライアントに対して学校の外の非日常的空間で治療的援助を行うスタイルから、自らが学校の内側に足を踏み入れ、クライアント（現場の生徒たちや先生方）と同じ空気を吸い、彼らを側で暖かく見守り、学校生活という日常的空间を共有しながら援助を行うスタイルへの転換をはからなければならない。また、教師があくまでも主役となって子どもの教育に取り組むという日本の学校独自のシステムを忘れてはならない。教師の多忙な生活や仕事の大変さや学校現場の厳しさに肌で触れながら、彼らの生の声に真剣に耳を傾け、戸惑い、つまずき、悩み、もがき苦しみながらも、さまざまな教育問題に懸命に立ち向かう先生に対する尊敬の念と理解と共感の気持ちを感じ取らなければならない。その上で、現場からの多様な要望に柔軟に対応しながら、先生方の力を最大限に引き出すために、心理臨床家としての自分ができることを考えるべきである。教師もスクールカウンセラーも、同じ学校という場で働きながら、子どもの成長と発達に関する援助という同じ課題に取り組む人間であることに変わりはない(近藤, 1994)。スクールカウンセラーは、一人きりで問題を抱えこまず、教師とともに、学校という場だからこそ生きてくる援助方法を追求していく必要があると思われる。

しかし同時に、スクールカウンセラーは、どこか組織をちょっとはずれたマージナルな所にいる自分も忘れないほうがよいだろう(河合, 1996)。教師同様、学校生活上の常識を身につけ、規定に従うことも大切であるが、学校組織から浮き上がらないことを意識し過ぎるために、知らない間に、カウンセラー独自の視点を見失っていく恐れがある。学校の文脈に溶け込みつつも、それにつきり過ぎず、心理臨床の専門家としての自分のスタンスやアイデンティティを維持できるバランス感覚を維持

していくことが重要であろう。

B. スクールカウンセラーの役割の認識と今後の活動領域の広がり

米国では既に、学校におけるスクールカウンセラーの専門的な役割が確立し、最近では、危機介入や治療だけでなく、予防も含めた学校全体の包括的・成長促進的かわりか、効果的なスクールカウンセリングプログラムとして注目を浴び始めている(Baker, 1992; Borders & Drury, 1992)。一方、我が国では、現時点ではまだ、スクールカウンセラーと学校現場の両者間に、スクールカウンセラーの役割についての明確な認識がない。日本のスクールカウンセラーの役割は、不登校やいじめなど一部の生徒を対象にした問題の対応や危機介入を行うことという認識が一般的である。しかし、今後、我が国でも、石隈(1995a, 1995b)が定義するように、スクールカウンセラーが「学校教育における心理教育援助サービスの専門家」としての地位を確立していくのであれば、米国のように、全ての生徒を対象にした包括的・成長促進的サービスの提供も考えていく必要が出てくると思われる。急に何もかもを行うことは難しいであろうが、現場のニーズや状況を考慮しながら、無理せず、自分のできるところから少しずつ活動領域を広げ、現場の先生方に、スクールカウンセラーの役割への認識を高めてもらい、活動を評価してもらうことが望まれるだろう。

C. 日本の大学院におけるスクールカウンセラー養成プログラムの方向性

米国の大学院では、学校現場のニーズに応えられる実践家としてのスクールカウンセラー養成プログラムが確立していた。最近では更に、カウンセラーの養成基準の急な高まりとともに、スーパーヴィジョンの時間数の増加など、プログラムの見直しも行われている(Osborne & Purkey, 1995)。一方、初期の経験的学習や訓練がカウンセラーのその後の成長に与える影響の価値は十分認識されているにもかかわらず(Holmes, Cook, & Rothstein, 1991)、日本の大学院では、スクールカウンセラーが、学校におけるインターン(現場実習)経験やケースカンファレンスやスーパーヴィジョンを通じて、「体験に裏打ちされた臨床の知」(佐治・岡村・保坂, 1996)を習得できる養成プログラムやカリキュラムの内容はまだ十分整備されていないところが多い。従って、多くのカウンセラーは、学校システム全体への理解が欠けたまま学校現場に派遣されることになり、困難を感じている。ヤギ(1998)は、このような状況を、「何の水泳のレッスンも受けずに、

学校というプールに飛び込み、そこで初めて水泳のテクニックを学び、もがきながらプールサイドの反対側に泳ぎ着こうとしている。」という比喻を使って形容する。今後、我が国においても、日米の文化的背景や学校教育制度の違いを考慮に入れながら、スクールカウンセラーの養成プログラムを制度的に保証していくことが、緊急の課題となっていくであろう。

日本のある県では既に、現在活躍しているスクールカウンセラーの下で、若いカウンセラーを養成していく試みが実践されているが(村山, 1996), 将来, 派遣校数が増えれば, 上記の試みが, 養成機関である大学院と学校現場との協力の下で, 大学院のカリキュラムの中に組み込まれていくなど, 養成の一つのモデルとして発展していくことも可能になってくるのではないだろうか。国レベルや大学院レベルでのスクールカウンセラーの養成が遅れている今, 将来スクールカウンセラーを目指す学生は, 学生自身の積極的な関心と努力によって, 学外の研究機関や学会による研修会やワークショップ等に参加しながら, スクールカウンセリングに関する知識や技術を自分の力で獲得していくことも当然要求されてくるであろう。(財団法人日本臨床心理士資格認定協会, 1997)。

V. まとめ

我が国において, 複雑かつ深刻なさまざまな教育問題の解決は, 急を要する状況にある。今後, 21世紀に向けて, 学校教育現場における心理臨床家としてのスクールカウンセラーの積極的な活用の認識がますます高まっていくとともに, スクールカウンセラー制度が発展していくことは間違いない。これまで固く閉ざされていた学校の門は, 少しずつではあるが着実に外に向かって開かれ始めている。スクールカウンセラーは, 開かれた学校の扉の内側で, いかにして, その専門性を生かし, 子どもの教育問題の解決に貢献できるのかが厳しく問われている。時代の要請に応えていくためには, まず何よりも, 学校現場を知らない臨床家でなく, 学校現場で役立つ実践的な専門家として受け入れられていくことが不可欠であり, カウンセラー自身の力量と資質の向上が望まれる。スクールカウンセラーが, 学校現場における臨床経験や実習体験を積むことによって, スクールカウンセリングに関する専門知識や実践的技術を習得できるよう, 大学院の養成プログラムやカリキュラムの内容を更に改良し充実させていくことが, 今後の重要な課題として残されている。

(指導教官 近藤邦夫教授)

付記

本論文の作成にあたり, 東京大学近藤邦夫教授には, 暖かい励ましのお言葉とともに, 懇切丁寧なご指導を賜りました。また, 米国留学時代に, ポストン大学指導教官(当時)の Dr. Betsy Speicher, C高校のスクールガイダンスカウンセラーの Mr. Bradley Tony, そしてそこで出会った多くの教職員と生徒たちから, スクールカウンセラーとして生きていくための貴重な経験と示唆を頂きました。心より厚くお礼申し上げます。

注

- 1) マサチューセッツ州スクールガイダンスカウンセラー資格認定基準に基づくポストン大学大学院教育学研究科カウンセリング専攻学科修士課程(スクールカウンセラー養成コース)のカリキュラム (Boston University Program Handbook, 1992)

授業科目名		単位数
必修科目	カウンセリング：原理・理論・実践	4
	異文化間カウンセリング	4
	臨床的評価・心理学テスト	4
	研究法(質的研究法あるいは量的研究法)	4
	人間の発達：理論とその応用	4
	スーパーヴァイザーの下でのインターン	8(通年)
	スクールカウンセリング	4
	職業カウンセリング	4
選択科目	カウンセリングにおける性の問題	4
	家族構成と家族療法	4
	児童虐待	4
	行動療法と遊戯療法	4
	対生徒サービスの導入	4
	ヒューマンセクシュアリティ	4
	女性カウンセリング	4
	個別テスト	4
	グループカウンセリング	4
	成人期の心理学	4
思春期・青年期の社会化	4	

主要参考文献

- 原田正文・府川満晴・林秀子 1997 スクールカウンセリング再考 朱鷺書房
- 東山紘久 1996 臨床心理学の視点から 大塚義孝(編) こころの科学増刊 スクールカウンセラーの実際 日本評論社
- 平木典子 1995 カウンセリングの話 増補 朝日新聞社
- 石隈利紀 1995a 何がスクールカウンセラーの役割と機能に影響を与えるか—日本におけるスクールカウンセラーのあり方をめぐって— 筑波大学臨床心理学論集, 11, 1-3
- 石隈利紀 1995b スクールカウンセラーと学校心理学 村山正治・山本和郎(編) スクールカウンセラー: その理論と展望 ミネルヴァ書房
- 石隈利紀 1996 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは カウンセリング研究, 29, 226-239
- 伊東博 1980 新訂・カウンセリング 誠信書房
- 伊藤美奈子 1997 小・中学校における教育相談係の意識と研修に関する一考察 教育心理学研究, 45, 295-302
- 河合隼雄・富岡賢治・村山正治・黒沢幸子・大塚義孝 1996 【座談会】スクールカウンセラーの展開—学校臨床心理士への期待 大塚義孝(編) 前掲書
- 國分康孝 1998 日本におけるスクールカウンセリングの課題 カウンセリング研究, 31, 82-87
- 近藤邦夫 1995 スクールカウンセラーと学校臨床心理学 村山正治・山本和郎(編) 前掲書
- 近藤邦夫 1994 教師と子どもの関係づくり—学校の臨床心理学 東京大学出版会
- 村山正治 1995 スクールカウンセラーの新しい時代の幕開け 村山正治・山本和郎(編) 前掲書
- 村山正治 1997 学校臨床心理士の意義と課題 九州大学心理臨床研究, 16, 5-16
- 成田義弘 1996 精神医学の視点から 大塚義孝(編) 前掲書
- 大塚義孝(編) 1995 こころの科学増刊 臨床心理士入門【改訂版】 日本評論社
- 佐治守夫・岡村達也・保坂亨 1996 カウンセリングを学ぶ—理論・体験・実習— 東京大学出版会
- 篠原睦治 1995 体制順応としてのカウンセリング—治療論批判— トータルな生き方を邪魔するもの 子どもの健康を考える会(編) 今なぜ、学校カウンセリングか 現代書館
- ダリル・ヤギ 1998 スクールカウンセリング入門—アメリカの実践に学ぶ— 勁草書房
- 横湯園子 1997 子どもの心の不思議—臨床という仕事から 柏書房
- 財団法人日本臨床心理士資格認定協会(監修) 1997 臨床心理士になるために 第10版 誠信書房
- Baker, S. (1992). School counselors for the twenty-first century. New York: Macmillan.
- Borders, L. D., & Drury, S. (1992). Comprehensive school counseling programs: A review for policy makers and practitioners. *Journal of Counseling & Development*, 70, 487-498.
- Boston University Program Handbook—Certificate Programs in School Guidance Counseling and Supervisor/Director for Pupil Personnel Services 1992
- Boston University School of Education Bulletin 1993-1994
- Gibson, R. L., Mitchell, M. H., & Basile, S. K. (1993). *Counseling in the Elementary School*. Boston, MA: Allyn and Bacon.
- Holmes, G. R., Cook, D., & Rothstein, W. (1991). Evaluation of a predoctoral clinical psychology internship program by intern graduates. *Journal of Clinical Psychology*, 47, 840-845.
- Osborne, W. L., & Purkey, W. W. (1995). A Model Faculty Peer Review Process for Counselor Education Programs. *Journal of Counseling & Development*, 73, 654-658.
- Paisley, P. O., & Borders, L. D. (1995). School Counseling: An Evolving Specialty. *Journal of Counseling & Development*, 74, 150-153.
- Paisley, P. O., & Hubbard, G. T. (1994). Developmental school counseling programs: From theory to practice. Alexandria, VA: American Counseling Association.
- Paisley, P. O., & Peace, S. D. (1995). Developmental principles: a framework for school counseling programs. *Elementary School Guidance & Counseling*, 30, 85-93.
- Schmidt, J. J. (1993). *Counseling in schools: Essential services and comprehensive programs*. Boston, MA: Allyn & Bacon.